

読書体験を共有する活動に着目した ワークショップ・プログラムの実践*

常盤大学 石田 喜美**

1. はじめに

本稿では、水戸芸術館現代美術ギャラリー内で実施したワークショップ・プログラムについて報告する。本プログラムは、水戸芸術館現代美術センターが期間限定でギャラリー内に開設するカフェ・スペースで行われた。本期間は「高校生ウィーク」と呼ばれ、高校生のギャラリー無料招待月間でもある。期間中には多くの高校生が来場し、他の来場者とのコミュニケーションを楽しむ。

高校生などのティーンエイジャーを対象にした読書支援のありかたについては、従来からその難しさが指摘されてきた。例えば赤木(2014)は次のように述べている。

中学生、高校生になると一人一人の成長や感じ方がバラバラになります。小学校のときは“みんな一緒に”大きくなれたのに、中学に入ったところから体の大きさも成長の早さも成長のパターンも違う……なので、ティーンエイジャーの読書と大人のかかわりについてはかなり難しくなります。(赤木, 2014, p. 69)

多様な興味・関心を持つ高校生に対し、読書活動を支援しようとする場合、どのような関わり方が可能なのか。これは非常に困難な問題である。前述の赤木は、支援のありかたを考えるためのひとつのポイントとして、「赤の他人」による支援を挙げる。中高生に対して本をすすめ

るにあたっては、両親よりも、司書や教員、キュレーターなどの「赤の他人」が良いというのである(同上, p.76)。このような意味で、美術館の教育プログラムの一環として、読書活動を支援するためのプログラムを実践することには意義がある。「高校生ウィーク」の会場には、キュレーターやアーティスト、ボランティアとして関わっている大人や近隣の学校に勤める教員、他校の学生・生徒など様々な人々が訪れる。このような場を、高校生のための読書活動支援のための環境として積極的に活用することが本実践のねらいである。

今回実施したのは以下のワークショップ・プログラムである(表1)。「①正直本棚」は、世界中で行われている「ブッククロッシング(Book Crossing)」などの試み(例えば、ブッククロッシング・ジャパン, 2007)を参考に、小泉英理(水戸芸術館現代美術センター)が中心となって考案したプログラムである(付記参照)。また、「②本をえらぶワークショップ」は、ブックピックオーケストラが川口メディアセブンで開催した「図書館を愉しむ選書」のワークショップ(ブックピックオーケストラ, 2012a, 2012b)を参考に、筆者を中心に考案したプログラムである(付記参照)。「③ビブリオバトル」は、ビブリオバトルの「公式ルール」(ビブリオバトル普及委員会, 2013, pp.6-7)に則って行われた本の紹介ゲームであり、対象者やその集め方、および会場についてのみ、筆者(第1回および第3回)および児島千鶴(常盤大学人間科学部・学生)が考案した。すべてのプログラムについて実際の運営は、小泉、児島および筆者の3名で行った(3.1, 4.1参照)。

これらはいずれも「読書体験をシェアして他者とつな

* How we make the place for sharing the book reading experiences: Case study of the workshop programs for teens in the contemporary art museum

** ISHIDA, Kimi (Tokiwa University)

表1：実施したワークショップ・プログラム

プログラム名	内容
①正直本棚	カフェ・スペース内に本の交換ができる本棚を設置。来場者に「誰かにあげたい本」を持ってきてもらい、その本を本棚にある本と交換して持ち帰ってもらうプログラム。 本の交換にあたっては、「あげる本」と「もらう本」を記入するとともに「あげる本」の「おすすめポイント」を記入する。
②本をえらぶワークショップ	本を選ぶことの楽しさを体験することを目的としたワークショップ。最初にくじで「お題」を決定し、決められた「お題」に沿って5冊以上の本を選ぶ。選んだ本はカフェ・スペース内の本棚に「お題」とコメントを記したカードとともに展示。
③ビブリオバトル	ビブリオバトルの公式ルールにしたがって、本の紹介ゲームを実施。第1回はボランティア・スタッフ、第2回は60歳以上の高齢者、第3回は一般来場者を主な対象として参加者を募集した。

がる場所」(桜井, 2012, p.4)をつくる試みである。

近年、このようなモノとしての本に着目した試みに注目が当たりつつある。「電子書籍元年」とも呼ばれた2010年以降、電子書籍をはじめとしたインターネット上での読み物がますます多く提供されるようになる一方、誰もが「一人一箱」分だけ本を売ることができる「一箱古本市」(南陀楼, 2009)や、本の紹介を行うコミュニケーション・ゲーム「ビブリオバトル」(谷口, 2013)をはじめ、読書会や朗読会、ブックカフェなど、各地でさまざまな試みが行われている¹。TwitterやFacebookなどのソーシャルメディアによって、他者の体験の共有を気軽に行うことができるようになった現在、これまで個人の経験でしかなかった読書体験を気軽に他者と共有することが可能となった。モノとしての本を通じて他者と交流しようとするこれら一連の試みも、このような流れの中でより一層注目されることが予想される。

若者を対象とした読書教育や読書支援活動においても、本を通じて人と出会う場／人を通じて本と出会う場の重要性が着目されている。秋田(2005a)は、OECD生徒の学習到達度調査(PISA)の2000年調査結果に基づき、「一人で孤独に自力で本を読み通すことには困難を覚える生徒が多い一方で、本にまつわる場所や本についての出来事を分かち合うことを嫌っているわけでは必ずしもないことがわかります」(秋田, 2005a, p.4)と考察して

いる。ここで秋田が根拠としているのは、読書行動に関する調査結果である。2009年調査結果においても「どうしても読まなければならない時しか、本は読まない」と回答した生徒数がOECD平均を上回る一方、「本の内容について人と話すのが好きだ」「本をプレゼントされるとうれしい」「本屋や図書館に行くのは楽しい」と回答した生徒数もOECD平均を上回っており、本にまつわる場や本を介したコミュニケーションに関心を持つ生徒は少ないことがわかる(国立教育政策研究所, 2010, pp. 100-103)。

本実践では、高校生を中心とした若者を対象に、このような「読書体験をシェアして他者とつながる場所」をデザインすることで、すでに本や読書を楽しむ他の若者や大人たちと出会うきっかけを創出する。これによって若者たちに、現代的な読書コミュニティ——読書体験を他者と共有することでつながりあおうとする人々が参加する実践コミュニティ²——への参加を促すことが目的である。

2. 「本を選ぶ」活動を重視したワークショップ・プログラム

本実践における3つのプログラムの設計にあたっては、チェインバーズ(2003)の「読書の輪」——「本を選ぶ」、「読む」、「もう一度、読みたいな」(同上, p.12)——を

参考にした。チェーンバーズは「たとえば、この『読書の輪』を見ればすべてが『本を選ぶ』ことから始まる、『読む』前にまず読む本を選ぶことが何より大事、というのを再認識することができます」(同上)と述べている。「本を選ぶ」ことは、出版点数が爆発的に多いとされる現代社会においても重要な活動のひとつである。「読書の輪」は子どもたちの読書を「手助けする大人」を想定しており、「本を選ぶ」で中心となる話題も、「手助けする大人」がいかに子どもたちに読ませる本を選ぶかというものに限られる(同上, pp.105-123)。しかしながら、高校生を中心とした若者たちへの読書支援を考える場合、これとは異なる「本を選ぶ」活動を構想する必要があると考えられる。

本実践では、「手助けする大人」が高校生に向けて直接「本を選ぶ」ことを支援するのではなく、読書体験の共有を楽しむ大人たちの「本を選ぶ」活動に参加することで、高校生が「本を選ぶ」という実践コミュニティの中に参加していくような、3つのワークショップ・プログラムを設計した。

「正直本棚」(表1①)は本の交換という活動を介して「本を選ぶ」「本を読む」「もう一度、読みたいな」という3つの活動をゆるやかにつなげていくことを意図したプログラムである。これに対し、「本をえらぶワークショップ」(表1②)では、「本を選ぶ」活動そのものに焦点を当てながら、参加者が選んだ本について紹介しあう時間を設けたり、選んだ本についてのコメントをカードにして「推薦図書館」³⁾に展示したりすることで他の参加者および来場者自身の「読む」活動へとつなげていくことを試みた。また、「ビブリオバトル」(表1③)では、自分が読み終えた本の中から「おすすめの本」を参加者全員に紹介してもらうことで、「もう一度、読みたいな」という思いを「本を選ぶ」活動へとつながるきっかけを提供することとした。つまり、「本をえらぶワークショップ」は「本を選ぶ」から「読む」へ、「ビブリオバトル」は「もう一度、読みたいな」から「本を選ぶ」へと「読書の輪」のサイクルを後押しすることを意図している。

これら3つのプログラムのうち、本稿では「正直本棚」(表1①)と「本をえらぶワークショップ」(表1②)についての実践を報告する⁴⁾。なお、「正直本棚」は会場の一角にある、設置型のワークショップであったため、その参加者は水戸芸術館のスタッフ、ボランティア・スタッフの高校生・大学生から、ギャラリーの来場者まで幅広い。これに対し、「本をえらぶワークショップ」は、ボランティア・スタッフとして参加していた高校生5名のみを対象としている。参加者5名のうち2名は近隣のA高校に通う友人同士であり、別の2名も水戸市内にあるB高校に通う友人同士であった。残りの1名も同様に水戸市内の高校に通う高校生であったが、彼女のみ単独で参加を行った。

なお、「本をえらぶワークショップ」に参加した高校生5名のうち2名については、「正直本棚」への参加(本の交換)も行っている。

3. 読書体験をシェアする実践コミュニティへの参加 ①: 「正直本棚」の事例から

3.1. 「正直本棚」の概要

「正直本棚」の概要は下記のとおりである。

- (1) 期間: 2013年3月10日(日)から4月7日(日)
- (2) 時間: 平日15:00-18:00, 土日祝日13:00-18:00
- (3) 会場: 水戸芸術館現代美術ギャラリー内ワークショップ室(仮設喫茶「基礎工事」会場内)
- (4) 対象: 制限なし
- (5) 参加方法: ①誰かにあげたい本を1冊持ってくる。
②正直カード(図1)に記入する。
③あげたい本に帯をつける。
④ほしい本を1冊持ち帰る。
- (6) 企画運営: 小泉英理(水戸芸術館現代美術センター), 児島千鶴(常盤大学人間科学部), 石田喜美(常盤大学)

なお、本プログラムを実施するにあたって、企画運営

者3名(筆者を含む)がそれぞれ本を持ち寄り、10冊程度の本を「正直本棚」のワークショップ・ブース(図2)に設置することとした。

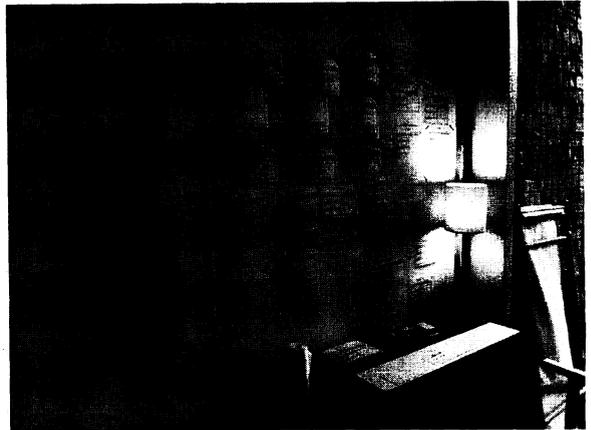


図2: 「正直本棚」ブース

正直カード

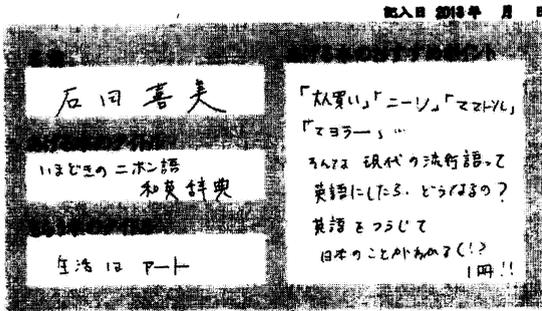


図1: 「正直カード」

3.2. 「正直カード」に見る参加者の交流

「正直本棚」のプログラムに参加する際に参加者が記す「正直カード」から、下記のような参加者同士のやりとりを見ることができた。以下、表2・表3は、今回記載された「正直カード」のうち、カード上でのやりとりが続いたものの一部である。

表2: 「正直カード」でのやりとり①

日付	参加者	あげる本	もらう本	おすすめポイント	備考
不明	A (高校生)	今村陽子『sunny』 (少年画報社)		ほんわりと暖かい本です。	
3/17	B (社会人)	森山大道『昼の学校 夜の学校』(平凡社)	今村陽子『sunny』 (少年画報社)	森山大道さん(写真家)の 問答集。写真を志す者たち 必読!まだ読んだことのない 方にぜひもらっていただ きたい!	※欄外コメント 写真勉強したいで す!いただきます m()m C
3/14	C (大学生)	近藤麻理恵『人生 がときめく片づけ の魔法』(サンマ ーク出版)	森山大道『昼の学校 夜の学校』(平凡社)	建築の展示を見たあとは、 <u>部屋を片付けたくなる人が 多い!はず!ぜんぜん人生 ときめかせてください!</u> 今の自分の部屋の状況は... 秘密です (・_・)....!! 正直!!!	※欄外コメント もらいました
3/22	D (CACギャラ リー トーカー ⁵⁾)	幸の実園『詩画集 あなたのお母さん でよかった』 (愛信会)	近藤麻理恵『人生がと きめく片づけの魔法』 (サンマーク出版)	希望の国の映画を見まし た。その時に幸の実園のこ とを知りました。愛の本で す。	
4/5	E (水戸芸術館 スタッフ)	みうらじゅん『い やげ物』(筑摩書 房)	幸の実園『あなたのお 母さんでよかった』(愛 信会)	とにかくくだらない。 そしてノスタルジック!!	

表3：「正直カード」でのやりとり②

日付	参加者	あげる本	もらう本	おすすめポイント	備考
初期	F (大学生)	宇野ジニア, 畠中恵『アイスクリン強し』(講談社)			※カードなし
3/21	G (社会人)	なだいなだ『心の底をのぞいたら』(筑摩書房)	宇野ジニア, 畠中恵『アイスクリン強し』(講談社)	精神科医のなだいなださんが高校生など若い人に向けてかいた, 心理学の本。心理学にちょっと興味のある方に読んでもらいたいです。	
3/28	H (高校生)	橋本治『桃尻語訳枕草子 上』(河出書房新社)	なだいなだ『心の底をのぞいたら』(筑摩書房)	小学生のときに1ページだけ読んで閉じられた本です。下を買う勇気がある方はどうぞもらって行ってください。下しか持っていない方は, これは運命です。持ち帰るしかないでしょう。	

表2・表3から, 「正直本棚」において, 学生・生徒が異なる立場・年齢の人々と本の交換を行っていることがわかる。DとEはいずれも社会人であり, かつ, 水戸芸術館に関わりの深い立場であるという意味で類似している。しかしその他のやりとりはすべて, 学生・生徒と社会人(水戸芸術館のスタッフおよびボランティアを含む)との間で生じている。

表2・表3以外でも本の交換のやりとりは生じているが成立した交換回数34のうち, 学生・生徒(中学生~大学生)と社会人の間で生じた交換回数は14であった。この数値は社会人同士で生じた交換回数17には及ばないものの, 学生・生徒同士の間で生じた交換回数3を大きく上回る。また, 連続交換回数が多くなるにつれ, 学生-社会人の間での交換の占める割合が多くなっている(表

4)。

次に, 学生・生徒による「おすすめポイント」の記述を見てみると, 「おすすめポイント」の名のとおり, 美術館を訪れた人に対してその本を推薦したい理由(表2: B「建築の展示を見たあとは, 部屋を片付けたくなる人が多い! はず! ぜんぜん人生ときめかせてください!」)や, その本から受けた印象をそのまま言語化しようとしたもの(表2: A「ほんわりと暖かい本です」)に加えて, 自分がその本を読みつづけることを断念したこと(表3: H「小学生のときに1ページだけ読んで閉じられた本です。」)があることに注目したい。

この記述は他者の「正直カード」に影響を受けたものであると考えられる。この「正直カード」が記載される以前, このカードと同様, 自分がその本を読み続けるこ

表4：「正直本棚」での本の交換回数

交換者	連続交換回数				交換回数合計
	1回	2回	3回	4回	
学生-学生	3	0	0	0	3
社会人-社会人	8	6	2	1	17
学生-社会人	6	4	1	3	14

とを断念したことについて記述した参加者がおり、その参加者によって記載されたカードが「正直本棚」のブースに掲示されていた。そのカードの「おすすめポイント」には、「重厚！（がゆえに読破できなかったので、どなたか読んであげてください。全5巻！）」と書かれていた。このカードでは、その本を読破できなかった理由を「重厚！」であることに求めることによって、その本の推薦へとつなげている。Hの「正直カード」にも「小学生のときに1ページだけ読んで閉じられた本です。」に続けて、「下を買う勇気がある方はどうぞもらってってください。下しか持っていない方は、これは運命です。持ち帰るしかないでしょう。」という記述がある。皮肉的なユーモアを交えたかたちではあるが、自分の読めなかった経験から、次の誰かに渡すための推薦へとつなげている。つまり、この「おすすめポイント」は他者の書いたカードによる影響を受けた可能性が高い。

2000年のPISAでは、「本を最後まで読み終えるのは困難だ」に「とてもよくあてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答した生徒の多さが話題となった。日常的に読書に親しんでいない生徒にとって、1冊の本を最後まで読み通すことは困難である。さらに、「最後まで読み通さなければならない」というプレッシャーが、本から生徒たちを遠ざける原因にもなりうる。

しかしながら、本を読みはじめたものの、最後まで読みきれずにあきらめてしまうという事態は、読書が好きか否かにかかわらず、誰もが経験する⁶。スキミング (skimming；「探し読み」) やスキヤニング (scanning；「あらまし読み」) (以上、邦訳は牧，2014，p.51) といった読みの戦略の存在が端的に示すように、1冊の本をいつでも、はじめから最後まで読まなければいけないわけでもない。つまり、学校外で営まれる読書活動において、「読破」「完読」は読書活動に必須なものではなく、あくまで、ひとつの読書活動のスタイルなのである。

「正直本棚」は、他者が必要とするかもしれないが、自分には必要でない本の存在を前提としている。「重厚！

(がゆえに読破できなかったので、どなたか読んであげてください。全5巻！)」というコメントに端的に示されているように、他の誰かにとっては大きな意義を持つ本であっても、様々な事情で、自分ではそれを読みこなすことができない状況もしばしば生じうる。「正直本棚」は、そのような、本の持つ意義の非対称性の上に成り立つプログラムである。あらゆる本の価値が、誰にでも等しかったとしたら、このプログラムは成り立ちえない。自分にとって不要な本に対して意義を持ちうる他者の存在、および、他者が意義を見出せなかった本に意義を見出す自分の存在があってはじめて、このプログラムは成立するのである。

Hは、「重厚！（がゆえに読破できなかったので、どなたか読んであげてください。全5巻！）」と書かれた「正直カード」に導かれるかたちで、「小学生のときに1ページだけ読んで閉じられた本」を「正直本棚」に設置した。Hにとってその本は、完全にその意義を失った本であったと推測される。しかし「重厚！…」と示されたカードは、彼女に、たとえ自分にとって意義を失った本であっても、誰かがその意義を見出しうるかもしれないということを教えたのではないか。自分が意義を見いだせないからといって、その本の存在意義がなくなるわけではない。前述したように、本来「正直本棚」は本に対する非対称な見方を前提としている。Hによるコメントは、彼女がこの前提を理解し、「正直本棚」の根底にある実践コミュニティに参加しはじめたことを示唆している。

4. 読書体験をシェアする実践コミュニティへの参加②：「本をえらぶワークショップ」の事例から

4.1. 「本をえらぶワークショップ」の概要

「本をえらぶワークショップ」の概要は下記のとおりである。

- (1) 日程：2013年3月21日 (水・祝)
- (2) 時間：13：00-17：30

(3) 会場：水戸芸術館現代美術ギャラリー内ワークショップ室（仮設喫茶「基礎工事」会場内）および水戸市立中央図書館内閉架書庫

(4) 参加者：仮設喫茶「基礎工事」ボランティア・スタッフ5名

- (5) 内容：①くじを引いて、「お題」を決定する。
 ②水戸市立中央図書館に移動し、「お題」に沿った本を5冊以上選ぶ。
 ③水戸芸術館現代美術ギャラリー内の会場に戻り、選んだ本を参加者同士で紹介する。
 ④選んだ本に絵や文章をつけて、「推薦図書館」に展示する。

(6) 企画運営：石田喜美（常盤大学）、児島千鶴（常盤大学人間科学部）、小泉英理（水戸芸術館現代美術センター）

本ワークショップは、仮設喫茶「基礎工事」のボランティア・スタッフに登録し、何度かカフェ・スペース内のボランティアとして活動していた高校生5名を対象として行った。

4.2. 「本をえらぶワークショップ」における参加

本ワークショップは、「推薦図書館」の本棚に並べる一般来場者向けの図書を選ぶための企画のひとつとして位置付けられていた。すなわち、参加している高校生たちにとっては、ボランティアとしての「仕事」のひとつでもあった。

チェインバーズ（2003）は「本を選ぶ」ことについて説明するなかで、現職の教師に対しておこなった、本の「リストづくり」について報告している（pp.114-119）。このように「リストづくり」は「手助けする大人」の活動として行われてきた。本ワークショップの特徴は、「手助けする大人」の側で行われてきたこの活動を、ゲーム的なプロセスを通して、高校生たち自身に体験してもらうことにある。

はじめに、あらかじめ用意された20の「お題」に加え、参加者ひとりひとりに「お題」を考えてもらい、「お題」のリストに書き加えた。それをもとに、くじ引きによって「お題」を決定した。今回は「主人公がイケメン」「おいしいような話」「偉大なる大自然」「人生山あり谷あり」「涙が止まらない話」の5つの「お題」が選ばれた。これらの「お題」をもとに、参加者たちが選んだ本のリス

表5：参加者（I）によって作成された本のリスト

お題	主人公がイケメン
①	末吉暁子、林明子『もりのかくれんぼう』偕成社
②	J・M・バリー『新訳ピーター・パン』（角川つばさ文庫）アスキー・メディアワークス
③	アンドルー・ラング、エロール・ル・カイン『アラジンと魔法のランプ』ほるぷ出版
④	白州昌子ら『白州次郎』（コロナブックス）平凡社
⑤	加来耕三ら『吉田松陰と高杉晋作』（コミック版日本の歴史13 幕末・維新人物伝）ポプラ社
⑥	有川浩『図書館戦争』メディアワークス
⑦	宗田理『ぼくらの七日間戦争』ポプラ社
⑧	伊坂幸太郎『重力ピエロ』新潮社
⑨	よしもとばなな『High and dry（はつ恋）』文藝春秋

表6：参加者（J）によって作成された本のリスト

お題	人生山あり谷あり
①	ガース・ウィリアムズ『しろいうさぎとくろいうさぎ』Harper Collins
②	さくらももこ『ひとりずもう』小学館
③	加藤宗哉『死に至る恋—情死』荒地出版社
④	司馬遼太郎『関ヶ原』新潮社
⑤	川上弘美『センセイの鞆』平凡社
⑥	石田衣良『娼年』集英社（※その場では借りだしができなかったため後日追加）

トの例を以下に示す(表5・表6)。参加者によって選ばれた本のリストには、ジャンルも対象年齢もさまざまな本のタイトルが並んでいる。ここから、本ワークショップの参加者が「お題」をもとに本との出会いを広げていった様子をうかがいしることができる。

たとえば、「主人公がイケメン」という「お題」をもとに本を探したIは、まず自分が初めて出会った「憧れの人」(2013年3月21日フィールドノートより)である「おにいちゃん」が出てくる絵本(『もりのかくれんぼう』)を探す。次に、自分にとっての「イケメン」である「白州次郎」と「ピーターパン」に関する本(『白州次郎』『新訳ピーター・パン』)を探す。その後、彼女はさらに「主人公がイケメン」に関する解釈を拡大し、映画・ドラマ化した際に主人公が「イケメン」だった作品(『吉田松陰と高杉晋作』『図書館戦争』『重力ピエロ』)を探している。Iは、図書館内の会場に到着するなりすぐに司書に声をかけ、この3冊の検索を依頼していた。このようにして獲得された3冊は、本そのものを含むなんらかのメディアによって、「イケメン」という表象が構築されているものであった。Iはここから、さらに想像をふくらませ、自分がその本を映画化するとしたら、自分が「イケメン」だと思ふ男性俳優をキャストに当てたいと考える作品(『ぼくらの七日間戦争』)もリストに加えていく。以下は、選んできた本についてIが他のメンバーに紹介する場面である。

Iは次に『ぼくらの七日間戦争』を取り出し、この本はみんな個性の強い人たちなんですけど、私から見ると全員が「イケメン」です、と説明する。そして、表紙の中央右側の背の高い少年のイラストを指さしながら「私が一番好きなのは、この人」と言う。その場にいる参加者、石田、小泉さんが笑う。Iはさらに、自分がこの本を映画化するとしたら、この人の配役は伊勢谷友介だと付け加える。

(2013年3月21日フィールドノートより)

このような本探しを続けるなかで、Iは「イケメン」から自分の「初恋」へとテーマを移動させていく。そのような視点から探し出されたのが、『High and dry (はつ恋)』である。Iによれば、『High and dry (はつ恋)』は、こんな恋ができたらいいなあと思うような関係性が描かれている本であるということだった(2013年3月21日フィールドノートより)。

表6に示したJは、はじめに自分自身がねらっていた本を探しながらも、平行して、会場の本棚を眺めながら本探しを行っている様子であった。Jが当初ねらいを定めていた本は『センセイの鞆』と『関ヶ原』、そして『娼年』である。絵本『しろいうさぎとくろいうさぎ』やさくらもこのエッセイ『ひとりずもう』、加藤宗哉『死に至る恋—情死』については、本棚に並んでいる本を見ながら、自分自身が幼い頃に読んだ記憶を呼び起こしたり、その場で本を立ち読みしたりするなかで、「人生山あり谷あり」という「お題」に沿うと考えられたものと推測される。

このように、本ワークショップでは、「お題」をきっかけに、本を選ぶ活動の幅を広げる機会を提供することができた。谷口(2013)は『ビブリオバトル』における「テーマ」の設定が、「本を選ぶ発想の源」となることを指摘している(谷口, 2013, p.81)。「お題」「テーマ」を設定して、そこから本を選んだり、それに沿って本を紹介する活動は、「ビブリオバトル」以外にも、遊びやゲームなどさまざまなかたちで行われている(イベントとして行われている事例については、勝山, 2012を参照)。「リストづくり」の活動は、「手助けする大人」による活動である一方で、読書体験の共有を楽しみたい大人の活動でもある。本ワークショップは、「手助けする大人」と読書体験の共有を楽しみたい人々が共通して行っている活動を、ボランティアとして参加する高校生に「仕事」＝「手助けする大人」の活動として体験させることで、結果的に読書体験を共有する人々の実践コミュニティへと参入させる試みであったといえよう。

5. 本実践の成果と課題

本実践では、現在、「読書体験をシェアして他者とつながる」(桜井, 2012, p.4)実践コミュニティが存在することに着目し、そのようなコミュニティに高校生を中心とした若者を参入させることを目的としていた。本実践の成果から知ることができるのは、学校的なリテラシー実践⁸を乗り越えることの可能性である。「青年期のリテラシー」(adolescent literacy)に関する昨今の研究は、学校でのリテラシー実践と、学校外でのリテラシー実践の間にある断絶をどのように乗り越えられるかを議論している(Alvermann & Hinchman, 2012)。この研究潮流は、長い時間をかけて学習者が学校外で行うリテラシー実践の様相を明らかにしてきた。現在は、それら研究の蓄積を踏まえながら、いかにそれを学校での実践に結びつけるかを研究の焦点としている。

本稿では、「読書体験をシェアして他者とつながる」リテラシー実践が、高校生を中心とした若者に対して、学校的なリテラシー実践のオルタナティブを提示するとともに、学校/学校外の実践をつなぐ可能性を有することを明らかにしてきた。成田(2012)は、学校図書館が様々な生徒たちの「たまり場」となり、そこでの本や人との出会いの中から、生徒たちがさまざまな活動を発案し実現する姿を報告している。成田の報告する活動は「読書体験をシェアして他者とつながる」ことを目的とした活動ばかりではない。しかし、「小説をひとりで読む」といった狭義の読書活動のみを支援するのではなく、部活動とのコラボレーションや、生徒それぞれが関心ある領域のなかに本や読書を取り入れることを支援しようとする成田の試みは、学校外で行われているリテラシー実践をオルタナティブとして提示している点、そこから学校内外のリテラシー実践を架橋しようとする点で、本稿と共通するものがある。

今後の課題としては、複数のプログラムを連携させることによって、読書活動支援を行うための方策を探究することが挙げられる。本実践では3つのプログラムを実

施してきたが、限定された期間で実施されたこともあり、プログラム間の連携を図りながら、ひとつのプログラムの参加者を他のプログラムへと参加させていくことが困難であった。3つのプログラムはそれぞれに、高校生・大学生たちの読書活動への入り口をつくることには成功したが、それをさらに展開させ、深めていくためにはさらなる工夫が必要である。また、本実践の成果は非常に限られたものであり、本実践から高校生を対象とした若者たちへの読書教育や読書支援活動について一般的な結論を導き出すことは難しい。今後は「読書体験をシェアして他者とつながる場所」やそのような場所で営まれるリテラシー実践が高校生を中心とした若者たちにどのような点で教育的意義を持ちうるのかを明らかにする必要がある。

付記

本実践を行うにあたって、水戸芸術館現代美術センターの小泉英理氏、森山純子氏および常盤大学人間科学部の児島千鶴氏に多大なる協力を得た。なお、本実践はすべて、小泉英理氏、児島千鶴氏および筆者の3名で構成される企画チームにより企画・運営された。本稿で紹介した実践のうち、「正直本棚」の企画は小泉英理氏の発案によるものであり、高齢者を主な対象とした「ピブリオバトル」は児島千鶴氏の発案によるものである。その他の企画(「本をえらぶワークショップ」および、高齢者を対象としない「ピブリオバトル」)は筆者発案による企画である。

本稿を作成するにあたり、図1と図2の写真の掲載について、2014年9月13日に水戸芸術館現代美術センターによる了解を得た。

本研究で事例として取り上げた実践は、科学研究費補助金(研究活動スタート支援, 研究代表者: 石田喜美, 課題番号 23830064)「現代メディア社会の特質に応じるメディア・リテラシー教育の学習環境モデルの開発」による研究の一部であり、本研究の分析・考察は科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究, 研究代表者: 石田喜美, 課

題番号26590239)『本を選ぶ』活動を支援する読書教育プログラムの開発』の研究の一部である。なお、本稿の調査は、常盤大学・常盤短期大学研究倫理委員会による承認を得て実施されている。

注

- 1) 東京都内における試みを紹介したものとしては、勝山 (2012) がある。
- 2) 実践コミュニティ (community of practice) とは、「さまざまな関心や目的をもつ行為者が実践のやり方をしだいに身につけ、仕事を成しとげていくような社会的ゲーム (集団)」(田辺, 2003, p.21) を示す。実践コミュニティは制度的な枠組みを意味せず明確な成員性によって境界づけられないこともある。「人と人との相互行為が凝集し活動が組織されている現場をコミュニティと見なすのである。」(同上, p.22)
- 3) 「推薦図書館」とは、仮設喫茶「基礎工事」(水戸芸術館現代美術センターギャラリー内に設置されたカフェ・スペース) の中にあるブック・コーナーの名称である。通常は、水戸芸術館が所蔵する図書やカタログ、集団貸出し制度を用いてボランティア・スタッフらによって近隣の図書館から借りられた図書が並ぶ。
- 4) 「ビブリオバトル」(表1③) については本実践独自の試みではないため、本稿では報告を割愛する。「ビブリオバトル」の実際については谷口 (2013) およびビブリオバトル普及委員会 (2013) を参照。
- 5) 「CACギャラリートーカー」の、「CAC」とは現代美術センター (Contemporary Art Center) の略称である。「CACギャラリートーカー」は、水戸芸術館現代美術センターの市民ボランティアのひとつであり、展覧会が開催されている週末を中心に、来館者のための作品鑑賞ツアーを実施している。
- 6) 例えば財津 (2011) は「いまあまり本を読む習慣のない人のために、簡単に読書癖をつけるコツ」として、「1. おもしろくなければ、途中で本を閉じる。」「2. 飛ばし読み上等。」「3. アウトプットしよう。」の3点を挙げている (p.238)。

- 7) 「完読」とは、本をすべて読み終えたことを示すインターネット・スラングである。近年では「マンガで完読」シリーズ (日本文芸社) など、一般に使われる用語となりつつある。
- 8) リテラシー実践 (literacy practice) とは、書きことばが参加者の相互行為や解釈プロセスの中で用いられる状況 (literacy event) のみならず、その状況に対する考え方や信念、先入見などを意味する (Street, 1993, pp.12-13)。以下、「実践」とは書きことばを用いる状況に対する価値観を含むものとし、「活動」と区別する。

文献

- 赤木かん子 (2014) 『子どもを本嫌いにならない本』大修館書店
- 秋田喜代美 (2005a) 電子メディア時代の読書経験 秋田喜代美・庄司一幸編著『本を通して世界と出会う：中高生からの読書コミュニティづくり』北大路出版 pp.2-27
- 秋田喜代美 (2005b) 21世紀型読書コミュニティのデザイン 秋田喜代美・庄司一幸編著『本を通して世界と出会う：中高生からの読書コミュニティづくり』北大路出版 pp.28-44
- Alvermann, D.E., Hinchman, K. A. (Eds.) (2012) *Reconceptualizing the literacies in adolescents' lives: Bridging the everyday/ academic divide*, Third Edition. New York, NY: Routledge.
- ビブリオバトル普及委員会編 (2013) 『ビブリオバトル入門：本を通して人を知る・人を通して本を知る』情報科学技術協会
- ブッククロッシング・ジャパン (2007) 『Bookcrossing Japan (ブッククロッシング・ジャパンホームページ)』ブッククロッシング・ジャパン <http://www.bookcrossing.jp/> (参照2015-01-30)
- ブックピックオーケストラ (2012a) 「図書館を愉しむ選書」川口メディアセブンにて開催しました。「book pick

- orchestra(ブックピックオーケストラホームページ)』
ブックピックオーケストラ http://www.bookpickorchestra.com/report/2012/04/_making_library_in_the_library.html (参照2015-01-30)
- ブックピックオーケストラ (2012b) 図書館を愉しむ選書vol.2 at 川口メディアセブン『book pick orchestra (ブックピックオーケストラホームページ)』ブックピックオーケストラ http://www.bookpickorchestra.com/report/2012/10/vol2_at.html (参照2015-01-30)
- チェーンバーズ, A. (こだまともこ訳) (2003)『みんなで話そう, 本のこと: 子どもの読書を変える新しい試み』柏書房
- 勝山俊光編 (2012)『TOKYO BOOK SCENE: 読書体験をシェアする。新しい本の楽しみ方ガイド』玄光社
- 国立教育政策研究所 (2010)『生きるための知識と技能 4: OECD生徒の学習到達度調査 (PISA) 2009年調査 国際結果報告書』明石書店
- 田辺繁治 (2003)『生き方の人類学: 実践とは何か』講談社
- 牧恵子 (2014)『学生のための学び入門: ヒト・テキストとの対話からはじめよう』ナカニシヤ出版
- 成田康子 (2012)『みんなでつくろう学校図書館』岩波書店
- 南陀楼綾繁 (2009)『一箱古本市の歩きかた』光文社
- 桜井祐 (2012) INTRODUCTION 一人の読書も良いけれど 勝山俊光編 (2012)『TOKYO BOOK SCENE: 読書体験をシェアする。新しい本の楽しみ方ガイド』玄光社 pp.4-5
- Street, B. V. (1993) *Cross-cultural approaches to literacy*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 谷口忠大 (2013)『ビブリオバトル: 本を知り人を知る 書評ゲーム』文藝春秋
- 財津正人 (2011)『本のある生活: 本活のすすめ』コスモの本

受付: 2014. 2. 19

受理: 2015. 2. 4